

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第261集

長土呂遺跡群

下聖端遺跡Ⅵ

長野県佐久市長土呂下聖端遺跡Ⅵ発掘調査報告書

2019.3

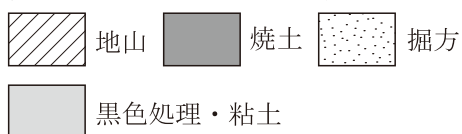
佐久市教育委員会

例言

1. 本書は、株式会社土屋ホームが行う宅地造成工事に伴う長土呂遺跡群下聖端遺跡VIの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 株式会社 土屋ホーム 佐久支店長 茂木 靖
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地 長土呂遺跡群 下聖端遺跡VI(NK S VI)
佐久市長土呂字南聖原516-2他3筆 516-1の一部
5. 調査期間及び面積 平成30年10月3日～11日(現場発掘作業)
平成30年10月12日～平成31年3月(報告書作成作業)
120㎡
6. 調査担当者 富沢一明
7. 本書の編集・執筆は富沢が行った。
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・単独ピット(P)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーンパターンは以下のことを示す。



調査状況(南より)

目次

- 例言・凡例・目次
- 第Ⅰ章 発掘調査の経緯
1. 経過と立地
 2. 調査体制
 3. 調査日誌
 4. 遺構・遺物の概要
 5. 標準土層
 6. 調査の方法
- 第Ⅱ章 遺構と遺物
1. 竪穴住居址
 2. ピット
 3. 調査の成果

写真図版
抄録



第1図 下聖端遺跡VI位置図(1:50000)

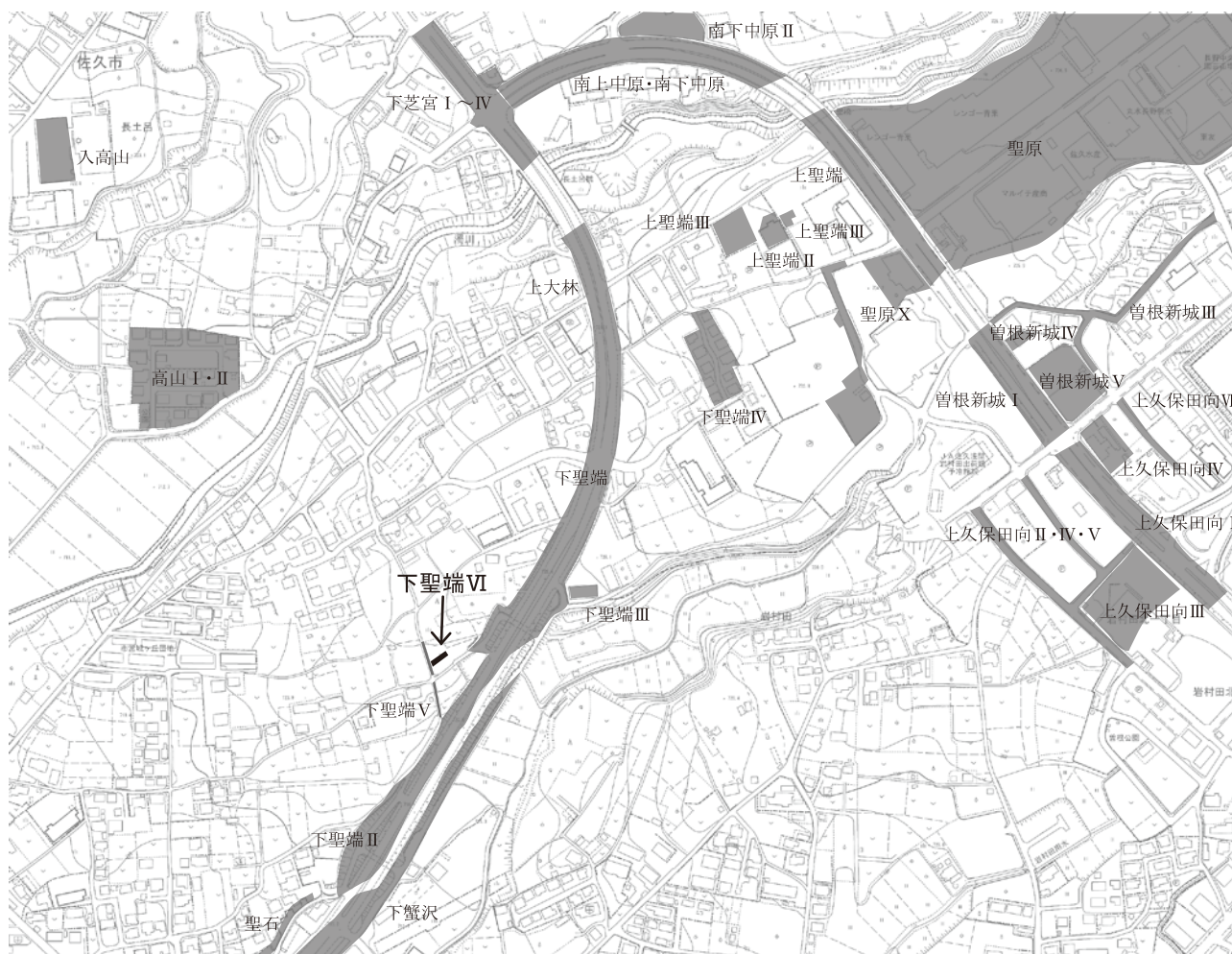
第 I 章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

下聖端遺跡Ⅵは、佐久市長土呂に所在し、長土呂遺跡群の中ほどに位置する。遺跡は、佐久平北部にみられる「田切り地形」の台地上に立地し、台地周辺の海拔は730m前後を測る。

本遺跡の周辺では、数多くの遺跡が調査されている。東西に延びる市道の**上聖端遺跡**や、**曾根遺跡**、**上久保田向遺跡**などの区画整理事業では、平成元年～7年度にかけて発掘調査がなされ、古墳時代から古代を中心とした集落跡が発見されている。出土遺物としては、**竪穴住居**から古代佐久郡の郷名の一つ「**刑部**」と記載された**墨書土器**が発見されている。また、同じ台地上の**聖原遺跡**は古墳時代後期から平安時代に及ぶ**竪穴住居**址や**掘立柱建物**址が1000棟近く発掘調査され、多種多様な遺物も出土している。特に平安時代の竪穴住居址から出土した「**仏鉢形土器**」には、見込み部に「**佛**」、体部外面に「**甲斐国山梨郡大野郷戸**」の多文字による古代甲斐国の地名が土器を擦るような暗文技法で表記されており、非常に**特殊な土器**と理解されている。またこの他には、**石製私印**「**伯万私印**」や**瓦塔**や**瓦堂**の破片、6種類に及ぶ**皇朝十二銭**、**八稜鏡**などが出土しており、**聖原遺跡**の特殊性が伺える。

今回、遺跡群内で株式会社土屋ホームにより宅地造成工事が計画され、市教育委員会に文化財保護法93条の届出がなされた。教育委員会では対象地の**試掘調査**を行い遺構が発見された為、遺跡の**保護措置**がとれない**道路部分**を中心に、**記録保存目的**の発掘調査を行うこととなった。



第2図 周辺遺跡位置図(1 : 3000)

2. 調査体制

調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 榑澤晴樹
事務局 社会教育部長 青木 源
文化振興課長 小林義夫
企画幹 武者新一
文化財調査係長 塩川宏幸
文化財調査係 小林眞寿 富沢一明 上原 学
久保浩一郎 萩原義治 森泉かよ子(臨時職員)

調査担当 富沢一明

調査員 甘利隆雄 小林敏雄 山田叔正 岩松茂年 油井満芳 塚 益子
堀籠まゆみ 堀籠保子 小林妙子 武者幸彦 渡辺 学 柳澤孝子

3. 調査日誌

平成30年 8月24日 株式会社土屋ホームより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
8月27日 長野県教育委員会へ市教育委員会より29佐教文振第1004-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
8月30日 長野県教育委員会より30教文第7-907号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
9月28日 市教育委員会により試掘確認調査
10月2日 株式会社土屋ホームと市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
10月3日～11日 記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成作業を行う。
10月12日 埋蔵文化財の発見届を佐久警察署に行う。
平成31年 3月 埋蔵文化財調査報告書を刊行する。

4. 遺構・遺物の概要

遺 構 竪穴住居址 2軒(古墳中期)

遺 物 土師器・須恵器(坏・甕・壺) 石製品(紡錘車) 鉄製品(鉄鏃)

5. 標準土層

今回の調査地点は南西側に僅かに傾斜する田切台地上で、基本層序は4層に分かれ、IV層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より60～70cmほどであった。

第I層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
耕作土しまり弱い。
第II層 10YR3/1 黒褐色土
軽石粒を含む。
第III層 10YR4/6 褐色土
P1層上部の漸移層で、軽石
粒子を多く含む。
第IV層 10YR7/8 黄橙色土
P1層でしまりあり。



遺構測量状況

6. 調査の方法

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

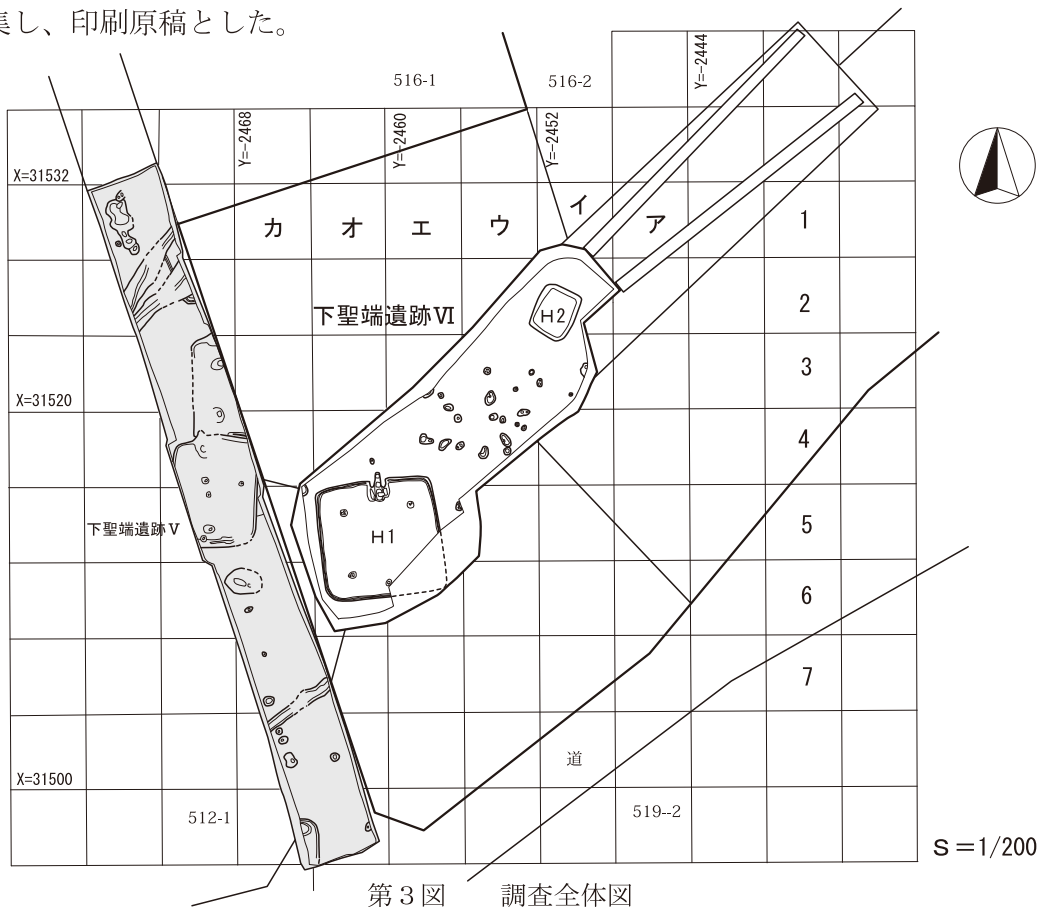
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は手で竹ブラシを用いおこない、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

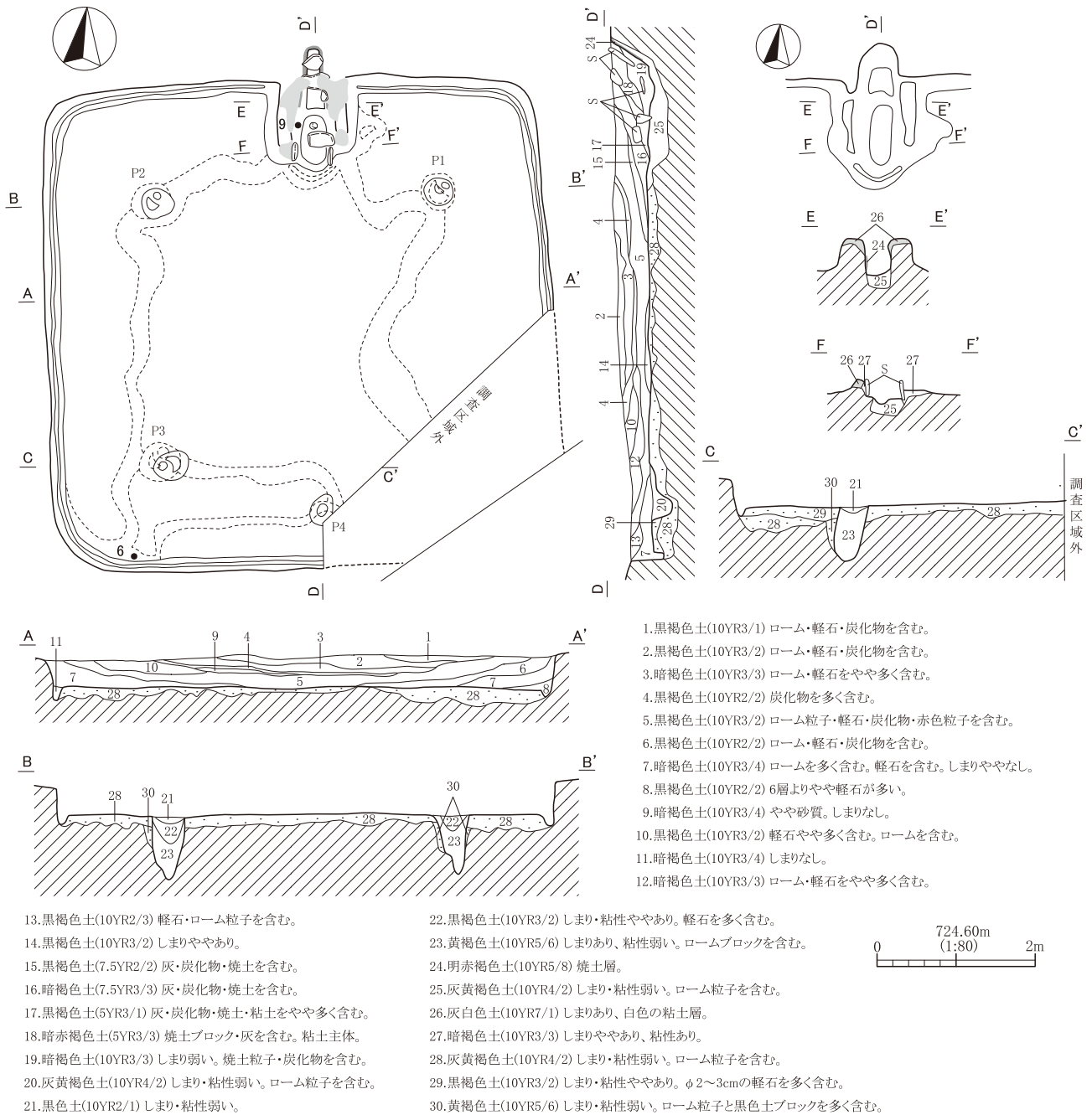


第II章 遺構と遺物

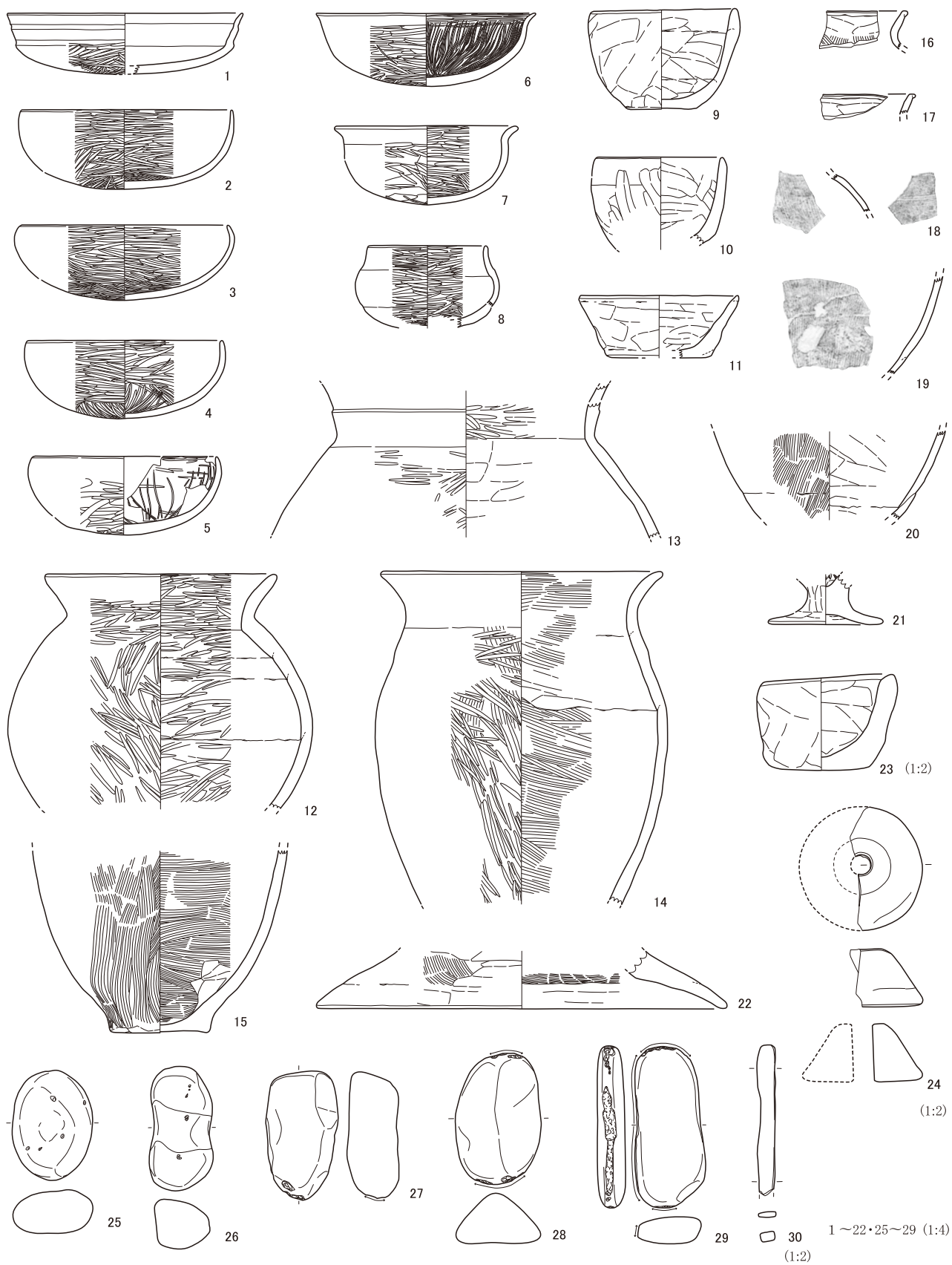
1. 竪穴住居址

(1) H1号住居址

本址は調査区西側で検出された。南東コーナー部分が調査区域外となる。形態は方形である。規模は、南北長5.84m・東西長6.06mを測る。床面積は検出部分で29.85㎡、推定で34.67㎡を測る。壁深さは北東コーナー部で最大0.48mを測る。住居主軸方位はN-5°-Wを示す。床はカマド前面以外は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。ピットは4か所で検出された。P1~P3は住居の主柱穴と考えられる。各ピットの規模はP1が径0.39m・深さ0.71m、P2が径0.38m・深さ0.80m、P3が径0.46m・深さ0.60m、P4が径0.39m・深さ0.19mを測る。P4は検出位置より入口施



第4図 H1号住居址実測図



第5图 H1号住居址出土遗物实测图

設と考えられる。

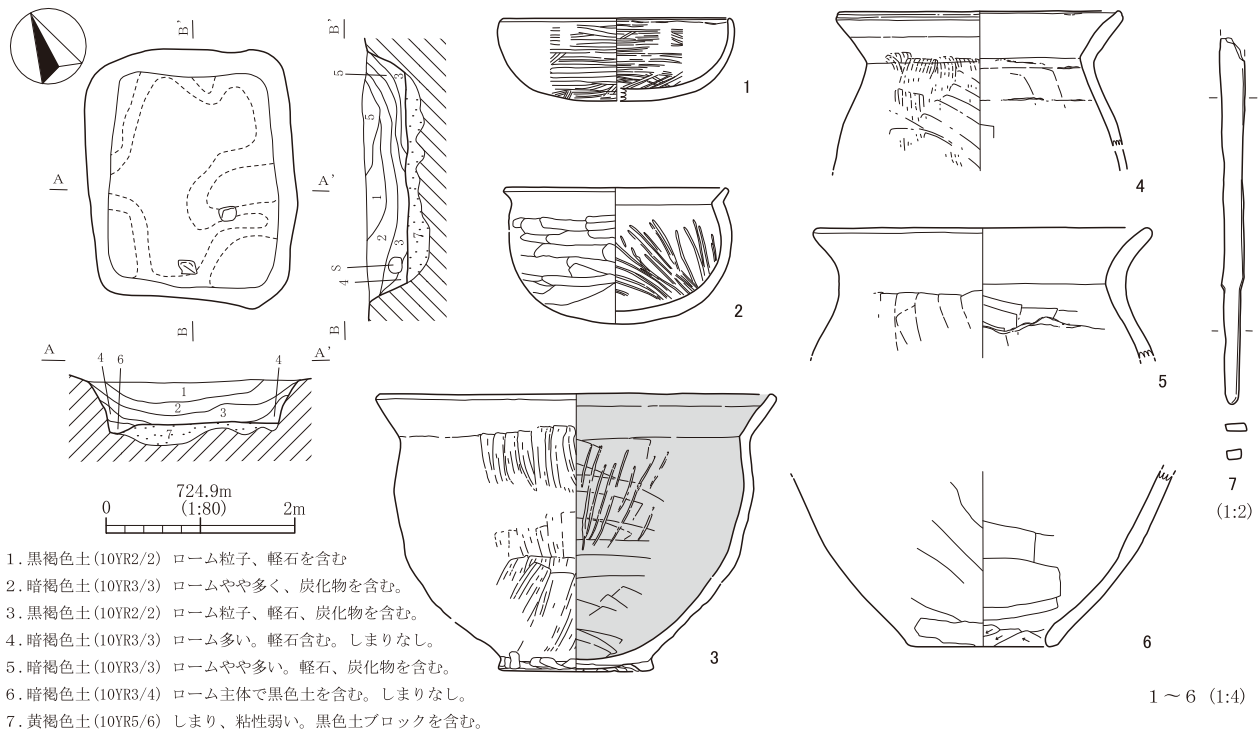
カマドは北壁中央部に構築されていた。袖部は地山を掘り残し構築しており、その周りに粘土を被覆していた。火床部や煙道部壁はよく焼けていた。住居掘り方は住居の中央が一段高くなる掘り込みで、段差の平均は9cm程を測る。

本址からの出土遺物は覆土内を中心に出土した。特に炭化物が混入した4層からの出土が多かった。1～8は土師器坏である。1はいわゆる須恵器模倣坏であり、口縁部に段を有する「有段口縁坏」と考えられる。2～5は口縁がやや内湾するタイプ、6と7は口縁が外湾するタイプの坏である。6は体部外面に焼成前のヘラ記号「×」が確認できる。9～11は手づくねのような土器で、一応坏としたが、用途は異なる事が推測される。12と13は壺の口縁部であり、よくみがかれていた。15～20は土師器甕である。16～20は、在地土器の胎土と異なり白色で、口縁部の形態や胴部の調整の状態から、いわゆる「宇田甕」の範疇として捉えられるか。21は台付甕の脚、22は形態不明の土器で、23は手づくね土器と判断した。24は石製紡錘車、30は鉄鏝の一部と考えられる。本址はこれら出土遺物から5世紀後半に位置づけられる。

(2) H2号住居址

本址は調査区東側で検出された。形態は長方形である。規模は、南北長2.25m・東西長1.78mを測る。床面積は3.78㎡を測る。壁深さは東壁中央で最大0.47mを測る。住居長軸方位はN-27°-Eを示す。床は全体に軟質で、貼床の厚さは最大で0.24mを測る。覆土は自然堆積で炭化物を少量含む。ピット等は検出されなかった。

本址からの出土遺物は覆土を中心に出土した。1は口縁が内湾するタイプの坏で丁寧なミガキが施されている。2は口縁が外斜するタイプの坏で、体部外面はナデが施されている。4と5は土師器甕である。3は土師器の鉢と考えられるが、底部に指頭痕が残る高台状の粘土紐を貼付し、上げ底状の底部を作り出している。この形状は、平底を作る途中の段階なのか、或いは高台状の底部を作ろうとしたものなのか判断に苦しむが、内面を黒色処理している事や、特徴的な器形であることから、外来の影響も視野にいれて考えなければならぬ土器と考える。6は土師器甕、7は鉄鏝の一部と考えられる。



第6図 H2号住居址及び出土遺物実測図

本址はこれらの出土遺物から5世紀後半に位置づけられる。しかし、遺構の性格については、住居址としての「H」の記号を今回付したが、カマドや柱穴がない事、但し床部分は顕著な貼り床を施している事などを考慮すると、いわゆる「堅穴建物址」的な捉え方をすべきなのかもしれない。いずれにしても、西側に存在する同時期のH1号住居址と関連付けて考えるべき遺構であろう。

2. ピット

今回の調査では25個の単独ピットを調査した。しかし、これらは形状の統一感もなく、出土遺物もなかった。調査面積が限られているため不確実な部分も多いが、今回の調査範囲では、掘立柱建物址等は存在しないと考えられる。



第7図 ピット実測図

第1表 ピット計測表

<>残存 単位 cm

No.	出土位置	長径	短径	深さ	形態	備考	No.	出土位置	長径	短径	深さ	形態	備考
P1	ウ・エ-5	45.0	<23.0>	47.0	-	黒色土(10YR2/1)しまり弱い。	P14	エ-3	50.0	35.0	18.0	楕円形	暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり。
P2	オ-4	29.0	18.0	6.0	楕円形	暗褐色土(10YR3/3)しまりややあり。	P15	エ-3	30.0	26.0	12.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P3	エ-4	72.0	40.0	25.0	不整形	暗褐色土(10YR3/3)しまりややあり。	P16	ウ-4	47.0	34.0	20.0	楕円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P4	エ-4	78.0	26.0	17.0	不整形	暗褐色土(10YR3/3)しまりややあり。	P17	ウ-3	38.0	25.0	18.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P5	ウ・エ-4	53.0	29.0	52.0	不整形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P18	ウ-3	25.0	23.0	27.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P6	ウ-4	70.0	33.0	21.0	不整形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P19	ウ-3	32.0	24.0	10.0	楕円形	暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり。
P7	ウ-4	44.0	38.0	16.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P20	イ-3	42.0	30.0	16.0	不整形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P8	ウ-4	74.0	39.0	24.0	楕円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P21	イ-3	21.0	15.0	17.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P9	ウ-4	31.0	24.0	10.0	楕円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P22	ウ-3	80.0	54.0	35.0	不整形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P10	ウ-4	19.0	18.0	9.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P23	イ-3	70.0	-	43.0	-	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P11	ウ-4	38.0	31.0	19.0	楕円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P24	エ-3・4	65.0	-	27.0	-	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P12	ウ-3・4	59.0	34.0	19.0	不整形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。	P25	カ-4・5	<56.0>	-	15.0	-	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性あり。
P13	ウ・エ-4	43.0	42.0	20.0	円形	黒色土(10YR2/1)しまり・粘性ややあり。							

3. 調査の成果

今回の発掘調査は120㎡という限られた範囲での調査であったが、周辺部の調査結果と合わせ貴重な調査成果が得られた。本項では二点に絞ってまとめたい。

まず、第一点としてH2号住居址の検出がある。本文でも記載した通り本址は住居址とするには躊躇する形態であるが、隣接する下聖端遺跡ⅡにおいてもH30号住居址として貼床を施し、カマド部分のみ掘り残した所謂「未完成の堅穴住居」が発見されている。時期は古墳時代後期である。このように、「未完」或いは小屋的な遺構が存在する事は確実であり、調査時の柔軟な対応が求められる。

二点目としては、H1号住居址出土の外来系と考えられる土師器甕についてである。本資料は、その特徴から「宇田甕」と捉えた。もしこの見解が正しければ、佐久地域はもとより、長野県内においても希少な出土例となる。先学より「S字甕」については拡散や定着について多くの論考があるが、東国での「宇田甕」についての認識は浅く、その点からも本資料は貴重なものとなるであろう。以上雑駁ではあるがまとめたい。



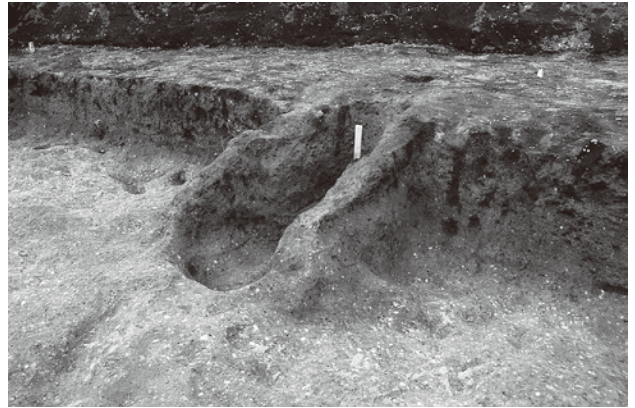
H 1 号住居址(南から)



H 1 号住居址カマド(南から)



H 1 号住居址掘方(南から)



H 1 号住居址カマド掘方(南東から)



H 1 号住居址遺物出土状況(東から)



H 2 号住居址(西から)



調査区全景(東から)



H1-1



H1-2



H1-3



H1-4



H1-5



H1-6



H1-7



H1-8



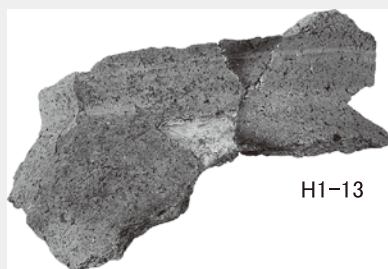
H1-11



H1-9



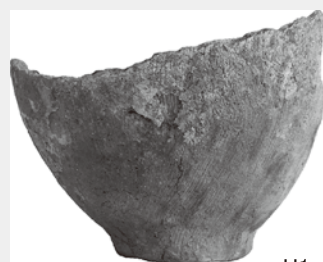
H1-10



H1-13



H1-12



H1-15



H1-16



H1-17



H1-18



H1-21



H1-22



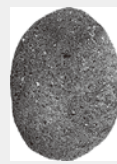
H1-14



H1-20



H1-19



H1-25



H1-26



H1-30
(1:2)



H1-23 (1:2)



H1-27



H1-28



H1-29



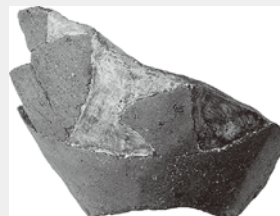
H2-1



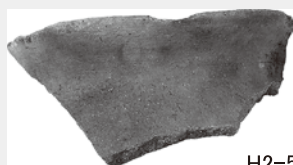
H2-24 (1:2)



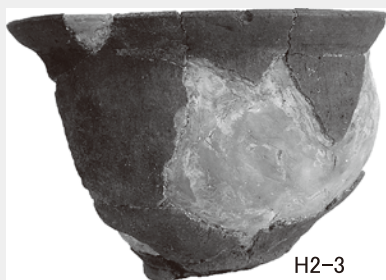
H2-2



H2-6



H2-5



H2-3



H2-4



H2-7
(1:2)

報告書抄録

ふりかな	ながとろいせきぐん しもひじりばたいせきろく							
書名	長土呂遺跡群 下聖端遺跡VI							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第261集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL 0267-63-5321 FAX 0267-63-5322							
発行年月日	平成31年(2019)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながとろいせきぐん しもひじりばた いせきろく 長土呂遺跡群 下聖端遺跡VI	さくしながとろ あざみなみひ じりはら 佐久市長土呂 字南聖原516-2 他3筆516-1一部	20217	9	36° 17.02	138° 28.21	20181003 ～ 20181011	120	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長土呂遺跡群 下聖端遺跡VI	集落址	古墳	住居址 2軒	土師器・須恵器 石器・鉄製品				
要 約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に古墳時代中期の 竪穴住居跡が検出され、同時代と考えられる炉やカマド施設をもたない小型の竪穴建物址も 確認された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第261集

長土呂遺跡群 下聖端遺跡VI

平成31年(2019) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限公司